

「また」という接続詞がある。累加や補充を表すといわれている。語源的には「二つに分かれたところ」を表すものと思われ、木の股も、人の股も、おそらくつながりがあると思われる。接続詞としての「また」は、論理の流れの中の一種の分かれ目において、その分かれたもう一方のほうを追加的に取り上げるといつ意味である。

副詞としての「また」も、こつこつ付け加えを表す意味が基本にあるといえるであろう。例えば、「太郎が以前来た」といつことがあったという文脈で、「太郎がまた来た。」といえは、追加的に「太郎が来た」といつことが取り上げられることになっている。

そう考えると、おもしろいのが、「なんでまたそんなことになるの?」「こりゃまた大変」などの「また」の意味である。これらの「また」は初めて起こったこと

も使える。意味としては、むしろ、驚きを表すような

ニュアンスがある。なんでこんなところで「また」が使われるのだろうか。考えられるのは、こつこつでも、追加的に取り上げるといつ意味が拡張していることだ。すなわち、この「また」が表すのは、何か驚くべき出来事に遭遇して、それを自分の経験の中に付け加えるようなニュアンスである。予想外のことが起こって、「付け加える」といつ心的操作をしているのではないだろうか。「また」は繰り返しを表すといつ意見もある。しかし、例えば、「毎朝」飯を食べるが、「また食べた」とはいいいにくい。毎日寝ているが、「また今日も寝る」といつのは変な気がする。あまりに日常的すぎると、「また」は使えなくなってしまう。やはり、「また」で表されるのは何かを追加するといつ意味だと考えるほうがよさそう。

では、後者の方がかっこいいような気がするが、どうだろう。そういえば、

街をゆき子供の傍を通る時

蜜柑の香せり冬がまた来る

木下利玄

そう考えると、「日(陽)はまた昇る」といつ題名の意味も納得できる。確かヘミングウェイの小説があったし、確かそんな名の映画があった。「日」は基本的に毎日必ず昇る。しかし、「こつこつ」また「を」を使うとちよつとふつこつでないようなニュアンスが出てくる。「日」が昇るといつことに次の日があるといつ特別な意味が込められるのである。その証拠に、例えば、「太陽は西に沈む」「また」をつけて、「太陽はまた西に沈む」となれば、あまりにも当たり前すぎて題名にはならない。「おいおい、太陽が西に沈まんことがあるんかい!」などとつっこまれてしまいそう。

「日」はまた昇る「の場合」「日」が昇る「こと全体を繰り返していつのではなく、述語の「昇る」だけを追加的に「また」で修飾することになっている。これによつて、「昇る」が今日や昨日と同じく、明日(明日以後)にも同じように起るといつ意味になる。「また」によつて、わざわざ付け加えられることとして表現されるため、例えば、あたかも「日」がもう昇らないのではないかといつ思いが存在したといつた文脈を言外に想像させるのである。

これには語順も重要だ。「ハ」「カ」の問題にも関わる「こつこつ」は省略する。(。」「また日は昇る」「日はまた昇る

といつ短歌があるが、「また」の語順を変えて、「また冬が来る」のようにするこつても文法的にはできる。

そこで、どの場所に「また」をおくかで意味がどう変わるのか、ちよつと考えてみよう。例えば、「太郎はまた次郎と東京へ行った。」「太郎は次郎とまた東京へ行った。」を比べると、誰といついつに注意していたなら一番目の文と二つ目の文といつ部分に注意していたら一番目の文といつような違いがある。つまり、「また」の後の部分に焦点が当てられる。

先ほどの「日はまた昇る」では、「昇る」ことが「またある」といつ点に焦点が当てられる。「日はまた昇る」何もいわなくても「そこに」明日「が」そして「希望」が読み込まれる。「また」は美はこれまたすごいコトバなのである。